

阿寒に果つ

©一九七三 検印廃止

定価七二〇円

昭和四十八年十一月三十日初版発行
昭和四十九年一月三十日三版発行

著者 渡辺淳一

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話（五六二）五九二二（代）

振替 東京三四

阿寒に果つ

序 章

死に顔の最も美しい死に方はなんだろうか。

睡眠薬、ガス中毒、入水、割腹、と自殺にはさまざまな死に方があるが、生前の有り様を保てるのは死後わずかの間で、一、二時間もするとどれも体は黒ずみ、死後硬直が現われ、やがては臭気さえ漂ってくる。死ねばそれまでとはいえ、死後幾時か経って見出された時、顔をそむけたくなるほど醜くなっているのは辛い。これらのなかでガス自殺だけは、死の直後一酸化炭素が血中に拡がり、両の頬が薔薇色に紅潮するというが、それもいつときのことらしい。愛する人が駆けつけてきて、薔薇色に輝く時に見出してくれればいいが、そうでなければ黒ずんだ醜さを曝^{さら}すだけとなる。

生きていた時より美しく、華麗に死ぬ方法はただ一つ、あの死に方しかない。あの澄んで冷え冷えとした死。

純子はそのことを知っていたのであろうか。あの若きで、果たして死ぬ時、そこまで計算していたであらうか。

この春、私は久しぶりに札幌へ戻ったのを機に、二十年ぶりに時任純子の遺影に逢い、彼女の残していった絵と再会した。写真はコートを着てベレーをかぶり、陽が眩しいのかかすかに顔を顰めていた。当然のことながらその顔は二十年前と少しも変わっていなかった。

「毎日見えています、純子は少しも変わりません」

私を感じたことを純子の母はするように表現した。私はうなずき、腰を浮かせて線香をあげた。「純子はこの写真が一番気に入っていたのです」

「たしかに、時々こんな表情をしましたよ」

「少し顔を顰めていて私は好きじゃないんですが、死んだらこれを飾ればいい、なんていっていったのですから」

「彼女がですか」

「本気が冗談か、そんなことをいうのが好きな子でした」

二十年前の疑問が私の脳裏に甦ったのはその時であった。

純子はそのことを承知で、計算ずくで死んだのではないか。

それは眼前の純子の写真とは何の繋がりもなく、ふと起きた疑問であった。だが一度起きるとそれはたちまちたしかなものとなり、私の心にどっかと腰を据えていた。

それにしてもこの思いもしないたしかさはなんであらうか。私は自分の心の先走りに戸惑いな

がら、やがて私の心のなかに二十年間、同じ疑いが生き続けたことを知った。

間違ひなくあれは冷たく孤独な死であった。最果ての、誰にも知られぬ死であった。しかし死は誰にとつても独りのものである。大勢の人々に看とられようと、ただ一人で原野に果てようと、死は死んでいく人だけのものである。

淋しかったことなどに同情する必要はない。それは死に直面した人は誰でも同じことだ。純子だけが例外ではない。いや、あの死は同情するどころか憎んでもいい。あれは同情するにはあまりに華麗で鮮かすぎる。あの死は驕慢で僭越な死ではなかったのか。すべてを計算しつくした小憎らしいまでに我儘な死ではなかったのか。

二十年という歳月が私に時任純子を客観視するだけの余裕を与えたというのか。

純子の遺影を前にして私の頭は自分でも驚くほど、醒めていた。

しかしどう醒めようと私はあの月日を忘れはしない。

一九五二年四月十三日。

二十年前のこの日、純子は雪のなから現われた。

場所は針葉樹林の切れた釧北峠の一角で、その位置からは裸の樹間を通して阿寒湖を見下せた。だが、冬の阿寒湖は雪におおわれ、白一色の平坦な雪原としか見えない。もともと四月になると深かった湖畔の雪もようやく溶け、湖の周辺部の氷はところどころ亀裂を生じ、蒼い湖面が顔を出していた。すでに湖上のスケートは禁じられ、摩周の方角から吹き下してくる風にも、たし

かな春の息吹きがあった。

この湖を見下す釧北峠は阿寒湖畔から北見相生へ抜ける道にある峠で、十一月から五月まで半年の間、道は雪で閉ざされる。この間峠へ向かうのは、営林署の巡視人かアイヌの樺^{モウ}だけで、それも馬轡で雪の少ない日にかざられていた。純子の死体も、たまたま雪溶けの陽気を見定めて、峠へ向かった湖畔の営林署員に発見されたのである。

見出された時、純子の死体は湖の方へ頭を向け、斜め半身にうつ伏せ気味に倒れていた。周りは低い熊笹があり、少し離れてエゾダシラカンバと樺^{モウ}の疎林があった。

初め営林署員の眼に入ったのは、赤いオーバーの背のふくらみと、その横から小さく出た左手の甲であった。両手で胸をかき抱き、左肩が落ち込んだ姿勢のため、左の手が右の肩口の上に出たのである。

白一色の静寂^{しじま}の峠で、雪から浮かび出た赤いコートと手の点景は、異国の絵のように不思議で鮮かであった。営林署員は初め、それをコートとは思わなかった。ただ赤い色があると思っただけである。すべてが枯れ果て、雪におおわれた峠に、それはありうべき色ではなかった。彼は自分がかを錯覚して見間違えているのではないかと思った。

道から雪の疎林に踏み込み、雪の間から顔を出した熊笹の前まできて、彼は初めて赤いのが布で、横に出ているのが人の手だと知った。手はかすかにむくみ、赤茶けていた。それを見詰めたまま彼がしばらくその場から動かなかったのは、興味というより恐怖からだった。

「かさ」と春陽のなかで雪の溶ける音以外、あたりには音はなにもなかった。裸木は雪のなかで

立ち尽し、眼下には白い盆を伏せた形の阿寒湖が拡がっていた。

営林署員が静まり返った峠から駈け下り、湖畔の駐在へ告げ、橇にスコップと筵をのせて再び峠へ戻ってきたのは、それから二時間あとだった。見出した時、中空にあった陽は雄阿寒岳の稜線に移動し、エゾダテシラカンバの樹影が雪の面を横切っていた。

営林署員と駐在は、一緒にかけてきた二人の村人の見守るなかで少しずつ周りから雪を除けはじめた。署員には、もはや静寂の怖さはなかったが、何が現われるか、見果てぬ無気味さはあった。

「スコップを深く入れないほうがいい」

表に出ている背のふくらみから、死体のおおよその様子はわかったが、手足の先まではわからなかった。二人は遠巻きに周りから雪を除け、徐々に輪を縮め、最後は手で雪を払い除けて、その全身を掘り出した。

純子はこちらも左半身に、湖の方へ頭を向けてうつ伏せに倒れていた。

脚はくの字に軽く曲げ、ズボンの下に白いブーツをはいていた。手は左手が胸元をまいて右の肩口に達し、右手は耳元へ当て、どういうわけか、右腕につけていた腕時計を耳に当てて聞いているように見えた。オーバーは陽の当たっていた部分だけ、いくらか色がさめていたが、他は原色のままで、フードがすっぽりと頭をおおっていた。

「体を戻しましょうか」

「いや、釧路から鑑識がくるまでこのままにしておこう」

駐在の言葉に営林署員は周囲へ目を向けた。

死体を囲んで頭から時計回りに、片方の手袋、煙草の「光」の箱、雄阿寒ホテルのマッチ、ハシカチーフ、そして左の肩口に空のアドルムのビンがころがっていた。

「やっぱり自殺だな」

「まだ若そうですね」

「一月の末に札幌から三人ほど探しに来て、わからないで帰ったけど、その時の家出人じゃないかな」

「するとその時からいままでここに？」

「もう二カ月になる」

駐在は死体のまわりに散らばっていた品物を調べ、手帳に書きつけた。書き終った時、峠の下から若い男が一人登ってきた。男は消防団の黒いオーバーを着て、制帽をかぶっていた。

「釧路からは何っていつてきた」

「それが、今日は鑑識の人が外に出払っていないんだって、戻ってきてから湖畔に上ったのでは、現場に着いたら夜になるので鑑識は明日やるから、今日は死体だけ確認して、そのまま戻ってくるように、とのことですよ」

「そうか」

駐在がうなずくと、営林署員がいった。

「それなら顔くらい見ておいたほうがいいでしょう、自殺に違いないんだから、仰向けにぐらい

したってかまいませんよ」

「さて、その前に写真だけ撮っておく」

駐在は古いカメラを取り出し、頭側と左右から一枚ずつ合計三枚の写真を撮った。それから営林署員が死体の横に屈み込むと、死体の肩口にかすかに残っている雪を払い、おしつぶされた熊笹の間に手をさし込んだ。

「硬くなっとる」

「凍っちゃったんだろう」

「それもあるけど、人間は死んだら硬くなるんだ」

営林署員が肩口を、駐在が足元を抱いて死体は仰向けに戻された。

雪の中から純子はゆっくりと顔をあげた。瞬間、男達は顔を引き、それからそっと唾を飲み込んだ。

純子の顔は見事に蒼ざめていた。血の一滴まで凍え果てたのか、蒼白の額に前髪がかすかに垂れ、堅く閉じた眼を長い睫がおおっていた。小さく先にきてやや丸みを帯びた鼻は透けるように白く、軽く受け口の脣は紫色に褪せていた。息を引き取る寸前、無意識に襟元を引っ掻いたのか、顎の下にふくらとした胸元が開いていたが、そこも血の色はなかった。

樹の間を抜ける斜陽を受けて、顔の右半分は蒼い翳りを見せていた。それは美しいというより、稚く、たおやかであった。もはや甦らぬ死がそこにあると知りながら、生きていることを主張しているようにさえ見える。雪のなかにいた二カ月の月日がなんの欠落ももたらさず、そこにとど

まっていた。間違ひなく生きていた時以上に、それは美しく、鮮かであった。

「この子に間違ひない」

「写真を見たんですか」

「前にな」

「ほんとにきれいな子だな」

「たしか十八とかいっていた」

「十八……」

男達は雪の中に円陣をつくって純子を見ていた。純子はそれを承知しているかのように軽く鼻を上向きに、眼を閉じていた。

「雪のなかに埋っていたから、元のままだ」

純子の顔と体の線にそって雪に人型ひとがたが出来、その雪面はいくらか堅くしまっていた。

「もう少し見つかるのが遅かったら、雪が溶けて腐ったかもしれない」

それは雪から出た左の手の赤茶けたむくみが示していた。短いとはいえ峠の日中の陽の光はすでに春のものであった。

「伏せていたから顔は助かった」

「頭は谷側だからな」

死ぬ時純子がそこまで計算していたかどうかは知る由もない。ただいえることは、手袋、煙草、マッチ、ハンカチーフ、アドルムのピンと、最後に身につけていたものを順に自分の周りに弧を

描いて捨て、その中間でつつ伏したことは純子の意志に違いなかった。一人で死ぬ淋しさを純子はそれらで取り囲むことによって紛^{まぎ}らせたのであろうか。

男達は純子の体を前と同じ伏せた形に戻し、雪の間からかすかにのぞいている右の頬を、熊笹の下の乾いた雪でうずめた。

「やっぱり薙をかぶせておきましようか」

「そうだな」

営林署員は死体に浅く雪をかぶせ、その上をさらに櫓に積んできた薙でおおった。薙は純子のほぼ全身をおおったが、白いブーツの先だけがわずかに出ていた。

「じゃ明日また」

駐在は薙の下で純子と、男達の両方へ話しかけるようにいった。四人は立上りそれからもう一度振り返るように雪の中の薙を見下した。陽が雄阿寒岳の背に傾き、それを受けて雌阿寒岳の雪面が赤く映えていた。

「なにか目印でも置いておこうか」

「大丈夫だろう」

「でも今晚じゅうに雪が来て、また埋まるかもしれない」

「もう四月の半ばだから、そんな大雪はこないでしょう」

「このダテカンバの少し上だ、憶えておこう」

四人は谷側につき出たエゾダテシラカンバの曲りくねった枝を見た。枝は木の疎らな谷の方へ

拡がり、その下に半面が陽の陰になった雪の阿寒湖が見下せた。

「行こう」

男達は順に帽子をとって一礼すると道に出た。

「どうして死んだのか」

歩きながら営林署員が低く呟いた。

「原因は男かな」

「でも、まだ学生だといっていたけど、絵を描く人らしい」

「じゃそんなことで、なにかあったのかな」

「わからん」

話しながら男達は時々峠の方をふり向いた。

「明日の検屍は何時になる？」

「家族が今夜、夜行で札幌を発つていうから、明日の朝、釧路について、それからジープで上つてきても明日の昼ころにはなるでしょう」

「親が見たらきつとびっくりするだろう」

峠の方角で鳥の一団が羽搏いた。黒い群れが峠につづく山の一角をおおっていた。

「鳥のやつ、屍体をついついたりしないでしょうね」

「藁をかけてあるから大丈夫だ」

男達はうなずくと再び橇をひきながら雪の道を湖畔へ向かって下っていった。

第一章 若き作家の章

一

二十年前、時任純子が私に近づいたのにはそれなりの理由があった。それは後年、純子の姉蘭子の口から直接きかされて知った。「あたしのクラスにひどく真面目くさった、つんとした子がいるのよ、あいつ誘惑してやる」

蘭子は純子がそういつていたと私に告げた。いまになって考えると、それはいかにも純子がいいような台詞であつた。だが当時、私はそんなことにはまるで気づいていなかった。

十七歳になったばかりの、平凡な高校二年生の私が、純子のそうした悪戯に気づかなかつたとしても無理はない。それに発端はたしかにそうであつたかも知れぬが、中途から私と純子の間は単なる悪戯ではなくなっていたのだから、それはさして重大な問題ではない。

純子が私に手紙をよこしたのは、まさしく私が十七歳になったばかりの秋だつた。二十年経つた今でもその月日を明確に憶えているのは、それが私の誕生日の前日だつたからである。

一日早いけど、誕生日おめでとう。

明日貴男の誕生日、祝ってあげる。

午後六時に、ミレットに来て、

純子

私はその手紙を午後の一時間目、国語の時間に、国語の教科書のなかにはさまれているのを発見した。

紙は赤い罫線の入った原稿用紙で、中央に時任蘭子という名が印刷されていた。それが純子の姉の名であることは、その一カ月後に純子から聞かされて知った。

初め読んだ時、私はすぐには手紙の真意を推量^{はか}りかねた。それに「純子」というのが誰のことかさえわからなかった。二度読み直してから、明日の十月二十四日が私の誕生日であり、昼休みに、時任純子が私に国語の教科書をちょっと見たいといって借りていったのを思い出した。

私はようやく書いてある意味を理解した。私は慌てて斜め前の時任純子の席を見た。だが斜め二つ前の純子の席は誰も坐っていないかった。私はさらに教師の眼を盗んで教室の後から横まで見廻したが純子の姿はどこにもなかった。純子は昼で帰ったに違いなかった。

純子はよく休む子だった。顔色はいつも透けたように白く、髪は赤茶けていた。濃紺の冬のセーラー服を着る時、その白さは色白の子の多い北国のなかでも特に際立っていた。

「あの人はテーバーなのよ」

純子の親友の宮川怜子は私にそっと教え、それから「テーバーって結核のことよ」と、いい足

した。

純子が二時間目や三時間目から遅れて出てきても、昼前に早退しても、教師達は彼女になにもいわない。純子はテーペーのうえに、天才的な少女画家だから仕方がない、といった雰囲気教師にも同級生の間にもあった。

私は純子から手紙をもらったことで国語の時間中、授業はほとんど頭に入らず、落ちつかなかった。

当時の私達は旧制から新制への学制の切り替え時に当り、高校二年の春から男女共学になった。それまで札幌市内にあった公立の三つの男子高校と、二つの女子高校が一旦統合され、それから東西南北、四つの地域に男女それぞれ同数に近く再分配され、住んでいる場所に近い高校へ通うことになったのである。

私の家は市の南西の山に近い所にあったので、第一高校から南高校と改められた学校へそのまま通うことになり、時任純子は道立札幌高等女学校から、彼女の家のすぐ前の南高校へ移った。

私達は高校二年生になって突然与えられた共学にすっかり戸惑ってしまった。いままで男ばかりの殺風景な高校に、自分達とはほぼ同数の女生徒が入ってきたのだから教室や授業の様子は一変してしまった。質実剛健を校是とし、蛮カラで鳴らしていた男生徒も急に大人しくなり、女生徒にいいところを見せようと親切な口をきいたり、今までより勉強に励む者もいた。もちろん一方では意識的に硬派をきどり、女生徒を無視する者もいた。